

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	英米文学	専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科英米文学専攻博士課程後期課程三年		横山晃 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	文学部教授		舌津智之 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題名	1930年代におけるヘミングウェイの男性性と南北戦争						
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科英米文学専攻博士課程後期課程三年		横山晃				
研究期間	2013 年度						
研究経費	(支出金額) 184 千円 / (採択金額) 200 千円						

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

1930年代におけるヘミングウェイの男性性を探りながら、同時に南北戦争から19世紀末までに確立していったアメリカにおけるジェンダー意識の流れを、その当時の社会的要因を参照しながら明らかにしていく。前年度は、1930年代から冷戦まで、というくくりで研究を進めていった経緯があるため、将来的には、南北戦争から冷戦までを網羅する研究の一部に本研究を位置付ける。大恐慌によって、男性を働き手の中心とした経済の基盤が揺らいだ時代、そして父を自殺によって失った時代にヘミングウェイは一層男性性へのオブセッションに取りつかれるのだが、海外諸国を旅しながら目指される男性性の再獲得が、いかなるジェンダー意識の変容をもたらすかに焦点を合わせていく。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[南北戦争] [男性性] [喪]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

“Monster”

南北戦争と1930年代の影響関係を探るため、まずは世紀末の作品を研究の対象に選んだ。この歴史的なタイムラインは、ヘミングウェイの家系においては、祖父から父、そしてアーネストまでの三世代に相当する。まずは、ヘミングウェイも影響を受けたとされる作家Stephen Craneの作品の中から中編“Monster”に焦点を合わせ、南北戦争後の時代における「リスペクタビリティ」の概念について考察した。具体的には、大火傷のため「モンスター」と呼ばれるようになった黒人Henry Johnsonが、彼の働くTrescott家で奴隷として表象されていることを論じた。大火傷後、ジョンソンは次第に他人とのコミュニケーションをとらなくなり、彼の苦しみはただ悲しげに口ずさまれる歌にのみ聞き取ることができる。ジョンソンの言明化されない苦しみは、彼を保護しようとするトレスコットがプライベートな領域に囲おうとするほどに増すものであり、世紀末における奴隷制度の問題は黒人への暴力という点から描き出されている。さらに、「顔がない」とされるジョンソンの異形な身体を、19世紀のフリークに関わる言説から読み解いた。P.T. バーナム等が成功させた異形の身体を見世物にするショウビジネスは、一面においてアブノーマルな身体が、道徳的規範「リスペクタビリティ」を遵守していることを示したといえる。それはフリークが結婚し、家庭を築くという形で提示されたが、この時代に家族という概念が確立・補強され、同時に男性性の概念もまた構築されたと言える。再度ヘミングウェイの家系に照らすなら世紀末とは、アーネストの父が青年時代を送った時代であるため、本中編を通してみえてくる当時の家族観、ジェンダー観は南北戦争と1930年代をつなぐ上で有益なポイントとなった。

2. *Death in the Afternoon*

次に、1930年代における南北戦争の影響を、ヘミングウェイがとりわけ父の死に見いだしていた、ということを検証した。1930年代の彼の作品には父の死をいかに受け入れるか、という葛藤が随所に現れているが、その中でも父の死の翌年に書き始めた闘牛に関する作品 *Death in the Afternoon* に父の影を読み取る。トーテムとしての牛を殺す儀式として闘牛を見ると、ヘミングウェイがそこで感じるという罪の感覚と、興奮の内には、フロイトが『トーテムとタブー』で論じた原父殺害のメカニズムが見て取れる。1930年代におけるヘミングウェイの葛藤を念頭におくならば、闘牛は父殺しの儀式として映し出される。闘牛に向けられた作者の意識に光を当てます。闘牛についての詳細な解説本である本作におけるヘミングウェイの主な関心は、暴力的な死、あるいは闘牛に見いだせる芸術論にあると言える。闘牛を芸術に例え、その廃頹に警鐘を鳴らす限りににおいて、本作は闘牛に魅せられた作者の闘牛擁護論に留まるが、興味深いことに彼の解説は、むしろその擁護のしきれなさを出発点としている。闘牛への熱情を、客観的な事実を交えながら口にする語り手は、したがって闘牛を何度も見に行く自身の欲望を自己分析的に語ろうとしているようにも見えよう。言い換えると、本作の主眼とは闘牛における瞬間の美を前面に押し出す点にあるのではなく、そこから一步引いて客観的な事実を積み上げながら、自身がなぜその瞬間を見ようとするのか、という問いへの答えを探る試みにあると言える。その答えとして、本論では闘牛の儀式的側面を確認することで、ヘミングウェイの自殺した父の影響を見て取る。死を演出する闘牛を悲劇と呼んだヘミングウェイが、いかに当時受け入れることのできなかつた父の死を自分なりに葬る意識が本作に描きこまれているか、その点に光をあてて議論を組み立てた。それは、父殺しとも呼びうるものであるが、本作における父殺しの表象は『老人と海』とインターテクスチュアルな関係に開かれている。父の死後、ヘミングウェイは自身もまた自殺する可能性、さらには子供たちにもその気質が伝播する可能性を憂慮しており、その意味で父の死を受け入れ、弔うということは、自分がいかに死ぬべきか、という問いと直結していた。

研究成果の概要 つづき

したがって父殺しの心理とは、闘牛場におけるヘミングウェイの死への衝動を浮かび上がらせるものであり、着目すべきは、闘牛を詳述するヘミングウェイがマゾヒスティックな欲望を抱いていたという読みの可能性である。『老人と海』においてマカジキヘダメージを与えることが自身へと還ってくる状況で、大きな獲物を釣るサンチャゴの願望は、死への欲動と表裏一体となり、彼のマゾヒズムを浮上させる。ヘミングウェイのマゾヒズムを論じるリチャード・ファンティナは、女性キャラクターとの関係から、男性主人公の受動的な側面に新たな光を投じているが(102)、ここではヘミングウェイが、喪失した父との関係から生じるマゾヒスティックな衝動を、作品化していることを考察する。『老人と海』において、サンチャゴは自身を慕う少年マノリンに、マカジキの角を譲ることを約束し、それによって二人の間には擬似的な父子関係が築かれることになるが、サンチャゴが帯びるキリストのイメージによって示唆されるのは、ヘミングウェイの描く父性が、常に自傷的なモメントを伴うということである。一般的に父の死後、ヘミングウェイの作品に現れているのは父への批判だと考えられているが、実際には、父に対する非難が自分自身に向けられた攻撃性として現れていることが分かる。ゆえにヘミングウェイにとって、父殺しとは、自らを死に至らしめるマゾヒスティックな衝動と不可分な関係にあったと言える。30年代に自らを「パパ」と称したヘミングウェイのジレンマは、「父」の位置を、このように、父殺しの儀式として闘牛のなかに見いだしたと言えるのではないか。

3. Pagan Spain

ヘミングウェイの作品は南北戦争と1930年代に勃発したスペイン内戦との間にアナロジーの関係を打ち立てているが、Richard WrightのPagan Spainは、内戦後のスペインにおけるトラウマを記述する。リチャード・ライトは第二次大戦後、フランス政府に招かれてパリを訪れ、その後家族とともに移り住んでいた (Felgar 9)。その後1954年の夏に、ライトはガートルード・スタインの勧めでスペインへと赴く(10)。スペインでの体験に基づき、ライトは1957年、『異教のスペイン』というタイトルで旅行記を出版するが、そこで綴られているのは、スペインが抱える内戦の記憶であった。第二次世界大戦の前哨戦ともいわれるスペイン内戦は1936年に勃発したが、反乱軍を率いたフランシスコ・フランコは国家元首として第二次大戦後もスペインを統治していた。『異教のスペイン』というタイトルが示すように、ライトがスペインで見たのは、フランコ政権下におけるカトリシズムの異教性であった。内戦時においてスペインのカトリック教会はファシズムと手を結んでおり、ライトが訪れる時代には反カトリック的な行動は厳しい取り締まりの対象となっているが、ライトが異教と呼ぶスペインのカトリシズムは、矛盾や逆説を孕んでいる。本論ではそうした異教性を、内戦のトラウマとの関わりから再考することを目的とした。そして、最終的にはスペインを記録するライトの意識に焦点を合わせ、そこから見えてくる作者の、冷戦期におけるアメリカへの眼差しを読み解くに至った。ライトはガートルード・スタインに勧められ、「西洋」とは何かを見るためにスペインを訪れた。冷戦期において、共産主義封じ込めのため合衆国は西側諸国と軍事関係を築く。合衆国が掲げていた、ヨーロッパ大陸との相互的な不干渉、いわゆるモンロー主義からトルーマン・ドクトリンへと転換する合衆国の政策は、こうしてアメリカ大陸を越えた世界をその視野に納めていた。同様に、ライトが見に行った西洋という概念が、国内の延長線上にあるとみなするならば、アメリカの西部と、西洋(“Western world”)との間の連続性は、重要な視点となる。合衆国政府にとって「友好的」であったスペインを観察するライトは(Fabre 415)、ファシズム国家と手を結ぶ合衆国への批判的視座を、西というイメージから提示していると言えるのではないか。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 論文

横山晃、Fighting the American Civil War in the 1930s: Sentimentality and Manhood in *For Whom the Bell Tolls*、*The Journal of the American Literature Society of Japan* No.12、2013、55-72。

④ 研究発表

- ・ 大学院英文学専攻課程協議会 (於：東洋大学)
「異形の身体への眼差し—*The Monster*における奴隷の表象」
- ・ 立教英米文学 (於：立教大学)
「異邦人が見た内戦のトラウマ—*Pagan Spain*における「異教」のパラドクス」